

三宅八幡信仰記

矢野貫一

三宅八幡神社の由緒沿革については不確かな部分が多い。そのため、近來の京都関係の名所誌、事典等に記述するところにも、疑わしい点が少ない。本稿では、地誌、名所記、地図の類を検討するとともに、神域の外に遺る鳥居、燈籠などの銘を調査することによって、不詳の点の解明を試みる。

三宅八幡神社は、疳の虫封じなど、小児の病に験ありとして、俗に虫八幡と呼ばれる。鎮座地は京都市左京区上高野三宅町。三宅と称する地域は、旧高野村北部から旧花園村南部に亘っており、明治二十二年町村制実施に伴い、それぞれ修学院村高野、岩倉村花園の小字となり、現在上高野三宅町、岩倉三宅町が旧名を引継いでいる。当社の所在は旧高野村の三宅であり、社号は地名に由ると思われる。もともと、社号が先で地名が後ということもあり得るが。いずれにせよ、地名と社号とは不離の関係にあると考えてよからう。

当社の由緒については、先ず社務所に備える「三宅八幡宮参拝の栞」を援こう。曰く「社神応神天皇一座 社伝に曰く推古天皇の御宇大徳冠小野妹子渡隋の天命を受け其途筑紫にて病に悩み宇佐八幡宮に祈願し平癒、渡隋の後も専ら祈念の功により種々の危難を免かれたり、帰朝の後報恩のため此地に大神を勧請せり其後多年を経て南朝の忠臣備後三郎当地に移住し邸内の鎮守として厚く尊崇せり爾来三宅八幡と称し社殿宏壮神田等もありしが応仁の兵火にかかり古記什宝等悉く焼失せり、数十年後里人相謀り復旧せしも漸く大破に及びたるを以て明治二年拜殿を同二十年本殿を建造せり今の社務所も是なり」と。その社伝なるものが

いつ成立したのか、詳かでない。

創祀に言及するもので最も夙いのは、管見するところ、明治二十八年六月刊、京都市参事会編『京華要誌』である。「推古天皇御代大徳冠小野毛人朝臣遣唐の時筑紫にて病起りたれば宇佐宮に祈り速に平癒を得滞りなく渡唐せんと彼の地より専ら祈念をなし種々の危難をも遁れたる故を以て帰朝の後当地に勧請せし所なりといふ」と記す。後続の書も多くこれに倣う。

しかしながら、毛人が推古天皇時代の人であり、大徳冠の位にあつたというのは事実に相違する。遣唐使に加つたという証拠もない。昭和三年十一月、京都市役所刊『京都名勝誌』に至つて、「小野妹子の子刑部卿大錦上毛人の勧請する所といふ」と改刪する。これは崇道神社裏の西明寺山で発見された毛人の墓誌によつて訂したものと思われる。もともとそれに刻む銘文の官職、位階、姓は毛人在世中のものでなく、後年に追加した墓誌かと考えられている。だが、ここでは問題とするに及ぶまい。

毛人の墓が発掘されたのは慶長十八年のことであり、墓誌の銘も周知のことであつた。また、このあたり一帯は古代の小野郷に属し、近世にも小野の名を留めていた。したがつて、墓と近い距離にある三宅八幡の創祀を小野毛人に附託するのは、蓋し自然な思ひつきであらう。

銘文によつて毛人の官職位階を訂すのはよいとして、遣唐の事までも殺ぎ落してしまつては、宇佐八幡を勧請したことの説明がつきにくい。そこで毛人に替つて、父の妹子が登場する段となつたのであらう。妹子ならば、推古天皇の代に隋に使し、大徳冠に昇つた。境内に京都市が建てた駒札には、小野妹子が遣隋使として赴いたおりのことと辻褄を合わせている。

京都市が名所旧跡に説明の駒札を建て始めたのはいつのことか、また当社の駒札はいつ建てられたのか、遽に明かにしがたい。これが先鞭をつけたのかどうかも判らぬが、ここ数十年來の京都の名所誌や事典類には、妹子勧請説を採るのが常套となつてゐる。例えば、昭和四十年十月淡交新社刊『京の里 八瀬・大原』で、杉本苑子は毛人勧請説を採つてゐるが、こうした守旧派は今や稀少といつてよい。

歴とした社伝が存するのならば、創祀の説が二転三転するのめいかかわしい話である。由緒を記す古文書がないからこそ、史実との整合を図つて修正が重ねられるのではなからうか。史実を氣にするならば、妹子にせよ、毛人にせよ、宇佐八幡宮創建以前の人であり、そもそも勧請の説そのものが怪しくなる。ともかく史実を穿鑿しすぎては、社寺の縁起など成り立たない。

備後三郎とのかかわりも、毛人勧請説とほぼ時を同じうして説かれた。明治二十八年二月発行、明治三十二年一月改正、志水鳩峯著『明治改正 京都名勝図会』に、「此社は原児島高徳の霊を祀る者なれども其南朝の忠臣たるを以て往時に於ては憚る所あり故に表面には八幡宮と称して嫌疑を避けし者なりといふ後に八幡大神をば勧請し合祀するなり三宅と称することは児島高徳本姓は三宅と歴史に載せたるを以て知るべきなり」とある。それが、降つて昭和七年八月刊、野中凡堂編『大京都誌』になると、少し話が変わる。すなわち、毛人が勧請し、「その後幾星霜を経て、備後三郎三宅高徳この地に住み、己が鎮守として崇敬せしより、三宅八幡と云ひならはすに至つたと伝へられるも、何等確証はない」と記す。毛人の勧請と接ぎ合せるために、いつか高徳のゆかりにも修正が施されたのであらう。

備後三郎といへば、『太平記』に「其の比備前国に児嶋備後三郎高徳と云者あり」とあつて、「天莫空勾踐 時非無范蠡」の詩で知られる人物である。『参考太平記』には「号三宅児嶋三郎、亦称今木」ともある。しかし、児島高徳ともいい、三宅高徳ともいうところから、同一人物とすることに不安を覚えるのか、昭和四十三年九月、修学院各種団体連絡会編集発行『修学院史誌』のごときは、「備後三郎、三宅高徳（児島高徳との説もあるが拠りどころがな

い) 当地に在住の頃」と書いている。

総じて備後三郎を無視する書が多い。しかしながら、三宅という地名、社名からすれば、この土地に根づいた伝承のようにも思われる。

明治四十四年一月刊、愛宕郡役所編『愛宕郡志』は、毛人に全く触れず、「創立由緒詳かならず其の三宅と称するより児島高德の事を謂ふ者あれど別に拠る所なし」と、高德をも一蹴する。信憑性の薄いことは採らぬのが本書の方針のようであるが、それでも神社の社伝、口碑を記す場合も少なくない。しかるに三宅八幡神社については、これを歯牙にもかけない。ということは、古くから伝えられた由緒でなく、取るに足らぬと判断したのではなからうか。

明治二十八年は、京都にとって特別の意味を有する年であった。即ち平安奠都千百年に当る。これを期して、祝典行事、事業が多彩に企画された。平安神宮鎮座、時代祭創始、第四回内国勸業博覧会開催、帝国京都博物館完成、東本願寺大師堂落成、実用市街電車開業等々、中には日本一、東洋一、世界一を誇るものもある。京都が遊覧の客で空前の股賑を呈したことは論を俟たず、博覧会は百二万人を超える入場者を算したという。したがって京都案内の出版もまた盛況に趨く。

三宅八幡神社の由緒に言及するものが、明治二十八年に刊行されたのも偶然ではあるまい。児島高德のことを誌す『京都名勝図会』、小野毛人のことを誌す『京華要誌』が出た。四月飯田信文堂刊、金森直次郎編『京都名勝案内記』には、「祭神は応神天皇なり俗に虫八幡と称し参詣多し」と、簡単なながら祭神を記す。八幡社ならば応神天皇を祀るのはきまったことかもしれぬが、今までその記載がなかった。

御利益はすでに世に知られ、信者の参詣は多い。だが、奠都千百年を機に杖を曳く遊覧客に対しては、重々しい由緒をもつて納得させたい。つまり、応神天皇、小野毛人、児島高德とのゆかりは、二十八年を目途に案出されたものではなかったか。

『京華要誌』に「遊覧曆表」なるものを掲げる。恒例の行事祭事のほかに、遷都記念祭に賛助する催しをも交えたものである。四月五月六月に諸社寺の宝物展覧が集中しており、中に五月六日「三宅八幡宮 宝物展覧」とある。展覧の品目も数量も明かでないが、おそらく信者の奉獻による什物がしかるべく陳列されたのであろう。ただし、今社務所で尋ねるに、宝物といった類は何一つ遺っておらぬとの答えであった。

当社は、明治十二年すでに村社に列していた。公式の社

格はともかく、この際神社に箔をつけるべく、由緒作りと宝物展覧とを企画した智慧者がいたのではなからうか。そしてそれなりに目的を達した。明治二十八年四月刊、山崎隆編輯発行『京都土産』（新撰京都叢書第十卷所収）の「大社一覽」の番付において、三宅八幡宮は東方前頭十七枚目に据えられている。羽束師神社、赤山神社に次ぐ位置で、劍神社、宇治神社、許波多神社、晴明神社などより上位にある。この格付けを得たには、神社側の宣伝が功を奏したと見てよからうか。

明治二十九年一月松浦松三著作発行、奇妙齋作『洛陽名所』と題する一枚摺りがある。曰く「カシコキ下カモ伏拝ミ、修学院ニワ高ノ川、三宅八マン松ケサキ、福モサヅケン大黒天、コレモ名高キ料理店、シバシ休マン山花平八。欣舞々タクワイくく」。修学院村では、詩仙堂、林丘寺、赤山神社、御蔭神社はなくとも、三宅八幡というまでのにし上る。

当社の由緒が、遷都記念祭を前に調えられた新出来の創作ではないかというのは、もとより私の臆測にすぎない。しかしながら、年経て伝えられた由緒と見るには、疑問の点が存する。一つは史実との整合を図ってか、二転三転していること、いま一つは明治二十八年より早い名所記の類

に、祭神、由緒を記したものが見当らぬことである。

管見に入るものを挙げれば、明治十年十月村上勘兵衛刊、福富正水原著・乙葉宗兵衛編輯『京都名所順覧記』の絵図に「三宅八幡宮」を、また十七年一月石田才次郎編輯出版『京都名所めぐり』の「京都名所方位案内図」に「三宅八幡」を記入しながら、本文中に取挙げない。明治十九年五月風月庄左衛門刊、横井達之輔編『明治改正 京都名勝一覽図会』は、三宅八幡社を挙げ、「此社は兎人虫一切に神妙有故諸人參詣多し」とだけ記す。明治二十四年三月内藤彦一著作兼発行『明治改正 京都名勝便覧図会』は前書の模倣乃至剽窃ともいふべき内容で、三宅八幡社の項はほぼ同文である。なお明治二十八年三月芸艸堂山田直三郎刊、安藤清著『京けんぶつ』は、「市街附近名勝略図」に「三宅八幡」の記入があるのみで、本文中に扱わない。すなわち、その靈驗をもつて存在は周知のことであつたけれども、書き留めるほどの由緒は世に知られていなかったと考えてよいのではあるまいか。

さらに不思議とすべきは、数多い近世の地誌、名所記、地図の類に当社の名すら記載なく、幕末に至つて忽然と現れることである。管窺に入るかぎりでは、文久二年の京都図の記載を初見とする。久しく固定した来歴をもたぬせい

か、近來の名所誌、事典の記述に食差いが見られ、心もとない。つまり三宅八幡神社の歴史は不安定なのである。

昭和五十九年九月平凡社刊『日本歴史地名大系第二七巻 京都市の地名』によれば、「元來はこの付近にあった

「延喜式」神名帳にみえる古社伊多太神社の境内に祀られていたものを、明治になって現在地に移したとも伝えるが、天保二年（一八三一）の京町絵図細見大成には既に今の地に「三宅ハチマン」が描かれる。しかし江戸期の見聞記、

名所記類では元禄一五年（一七〇二）の『山州名跡志』のみに高野村の八幡宮の記事がみえ、伊多太神社跡とほぼ同方面の地である蓮華寺の「在門前東、小祠^{南向}」の八幡宮があつたと記されている。これが三宅八幡宮の前身とすれば、移建はこの間のことであろう」とする。要するに元禄十五年以後、天保二年以前に、三宅八幡宮は伊多太神社跡から現在地に移建されたというこらしい。他の事典、名所誌に比べ、説くところが一見具体的考証的で頼もしい。しかし、この所説は初歩的な誤認誤解を犯している。

元禄十五年三月自序、正徳元年七月板『山州名跡志』巻五に、いかにも高野村の八幡宮の記述が見える。帰命山蓮華寺の項に次いで「八幡宮 在門前東 小祠^{南向}」と記す。眼を転じて、天明七年九月板『拾遺都名所図会』巻二の図を見るに、蓮華寺の門のすぐ前、東側に「八まん」が画か

れている。南向きの小祠で、左右背の三方を柵で囲い、鳥居や燈籠はない。『山州名跡志』の八幡宮はこれに相違あるまい。蓮華寺を含むこの地の小字を八幡と称し、今日も上高野八幡町の名を留めているのは、小祠ながら附近住民の信仰を集めていた故であろうが、現存しない。明治の神仏分離に際し何らかの処置がとられたのであろう。近隣の崇道神社境内に移すのが穏便と思われるけれども、現存の末社の八幡宮がそれであるか否か、確めがたい。

伊多太神社については、『拾遺都名所図会』に「今高野村西の山際に森あり社は絶たり」とあり、『愛宕郡志』によれば明治十六年に再興された。現在上高野大明神町の道路傍に「延喜式内社伊多太太社旧趾」の碑を建て、鳥居を備える。碑は昭和四十七年の建立にかかり、社を明治四十一年にここより崇道神社に遷したよしが刻まれている。

この伊多太神社跡と蓮華寺門前と、京都全体から見れば「ほぼ同方面の地」にちがいない。しかし、今は旧高野村内での位置を問うているのに、これでは話にならない。前者は西明寺山の西麓にあり、後者は南麓にあつて、村内では同方面の地とは言い難い。したがって、「伊多太神社の境内に祀られていた」とされる八幡宮と、蓮華寺門前の八幡宮とは同一の社ではありえず、『山州名跡志』に記す八幡宮をもつて三宅八幡神社の前身と見做すのは謬見と断じ

なければならぬ。

『京都市の地名』に天保二年の地図というのは、「新修京都叢書」第二十三巻別冊（昭和五十一年六月臨川書店刊）に収める『改正京町御絵図細見大成』であろうと思われる。「三宅ハチマン」ではなく、「三宅八マン」の記入がある。これは文叢堂竹原好兵衛板で、「天保二年辛卯七月彫刻 慶応四年戊辰二月再刻」と刊記にあるように、慶応四年現在の地図であつて、天保二年のものと見ることはできない。因に「新撰京都叢書」第十一巻下（昭和六十二年九月臨川書店刊）所収の『京町絵図細見大成』は、同じく竹原好兵衛板で天保二年七月の開板である。これには三宅八幡が記されていない。

三宅八幡の存在を文献で確認できるのが慶応四年ということなら、もうすこし溯ることができる。文久二年九月再版、三橋樓書房版『京都御絵図』と題する合羽摺りの地図がある。これに「三宅八マン」の記入が見られる。

ところが、文久二年図、慶応四年図ともに三宅八幡の位置に不審がある。現在鎮座するのは高野川右岸の地であるのに、両図とも左岸に記入している。文久二年図では「玉山いなり」の北にかなり距離をおいて「三宅八マン」があり、慶応四年図では「玉山いなり」の北に隣接して「三宅

八マン」がある。

玉山稲荷社については、安永九年板『都名所図会』に「玉山稲荷社は高野村にあり原内裏にありし祠なり享保年中此へ預らるゝ所なり」とあり、以後明治十七年刊『京都名所めぐり』にまで記述が見られる。何年か明かでないが、明治に入つて伏見稲荷大社に遷したよしで、権殿の後方に現存する。社前の説明板には、宝永五年「修学院の玉山」に祀つたとある。すると、高野村内に再転したのが享保年中ということか、その点も詳かでない。

昭和四十三年刊『修学院史誌』によれば、「檜峠を越えた所に祀つていたものを稲荷社に移され」、「明治の初年伏見稲荷神社へ合祀され、その遺跡に記念碑が最近迄あつたが、いつの間にか盗難に逢つたと古老は嘆いている」と記す。檜峠とは、今の修学院檜峠町の地であり、修学院村から高野村へ再転したことになる。

近世末期の地図や名所記には概ね玉山稲荷を記載しているものの、高野村における位置を正確に知ることはできない。昭和五十五年みどり会刊『上高野史誌』に、明治三十九年生れの佐竹武右エ門の談話を載せる。玉山稲荷が「上高野に在つた時は現集会所（昔は学校）の西隣どりと聞いています。この付近の町名を「稲荷町」と言います」と語る。集会所はいま崇道会館となっており、鎮座地は稲荷町

の通の南側と判明する。なお盗まれたのは、宝幢寺の石垣沿いにあつた「左玉山稲荷」と刻んだ道標らしい。

玉山稲荷社のかつての所在地は、高野川左岸、上高野稲荷町と知れる。では、その附近に三宅八幡宮の鎮座した形跡があるか。強いて覓めれば、叡山電鉄三宅八幡駅の傍に巨きな石の標柱が建っている。表には二羽の鳩の向き合う紋の下に「三宅八幡神社」、裏には「明治廿九年十二月建之 当村清水町中」と刻む。一見この先に神社があるやに錯覚させる。

しかし、この標柱は初めからここに建てられたのではない。社務所作成にかかる「古今記録下調」によれば、大原街道の山端に、明治三年十一月木製大鳥居を建て、明治二十八年七月これを石鳥居に替え、三十年一月鳥居東脇に標柱を建てたという。つまり当社への参詣道に鳥居と標柱とを建てたのである。山端には近世以来何軒かの茶店があり、往来の人々の足を休めるところであつた。ここならば、標柱を寄進した一乗寺清水町に近い。

大正十四年八瀬まで電車が通じ、三宅八幡駅が開業すると、大原街道を参詣道として利用する人は激減したにちがいない。自動車の通行がふえれば、街道の鳥居も邪魔になろう。いつの頃か、鳥居も標柱も山端から撤去されたと思

われる。標柱は、参詣者の降りる三宅八幡駅前に移された。鳥居は、今神社境内にある二の鳥居がそれであろうと推測する。「神鳩講社」の寄進で「明治廿八年六月建之」と刻んである。

このように見れば、高野川左岸に「三宅八マン」を記入したのは、地図製作者の粗忽としなければならぬ。高野村は高野川の両岸に跨がっている。地図の村名記入を検するに、左岸に記すのが大方の傾向であり、右岸に記すものは稀である。文久二年図も慶応四年図も、左岸に「たかの」と記入している。このため、高野村の主要部が左岸にあるように印象づけられるのは自然であろう。そして三宅八幡が高野村にあるというだけで、安易に左岸に記入したものと推察される。

三宅八幡登載の嚆矢をなす文久二年図、続く慶応四年図が、その位置を謬った罪は軽くない。直接か否かは判らぬが、その影響が後々まで跡をひく。明治二十八年四月刊、田中治兵衛編輯発行『新撰京都古今全図』、明治四十三年八月刊、笠原鴨涯・斎藤静花著『平安年中行事記』の「京都市街新地図」など、あいかわらず左岸に三宅八幡を記入することを止めない。

凡そ京都地図の市外部は概念図に描かれるのが常であり、

位置や距離の正確さを期待することはできない。それにしても、大きい川は土地の境界をなすものである。したがって、現地を歩いてみれば、鴨川や高野川の右岸に在るか左岸に在るかは紛う余地がないはずである。地図の作成に当たって、実地踏査を忽せにし、先行の地図に頼るところから誤りが跡を曳くのであらう。

明治十七年刊『京都名所めぐり』の「京都名所方位案内」で、高野川の西すなわち右岸に「川合社」「下加茂」「忝ヶ崎」「本涌寺」を記すのはよいとして、それらの北に、高野川の東すなわち左岸に在るべき「山花」（山端）「林丘寺」「赤山社」「玉山社」を記し、さらにその北に「三宅八幡」を置いている。

この奇妙な案内図は、明治十九年刊『京都名勝一覽図会』、明治二十四年刊『京都名勝便覽図会』にそのまま継承される。杜撰きわまる図であるが、高野川の支流である岩倉川を本流と誤認したところから、川筋に混乱を来したことが原因の一つではないかと思われる。

因に『京都名勝一覽図会』では、「三条大橋ヨリ東北西の名勝」図に、「山花村」「林丘寺」「赤山社」などを高野川の左岸に、「三宅八幡宮」を右岸に配している。そこまではよいが、「船岡山」「大徳寺」「金閣寺」などを高野川の西、賀茂川の東に記す失態を演じており、それを『京都

名勝便覽図会』が踏襲する。明治三十三年大阪市植田五三郎刊、後藤常太郎著作『京都名所地図』は、他の社寺の位置は概ね正しいのに、「三宅八幡社」のみを誤り、岩倉川の右岸に描く。

慶応四年の『京町御絵図細見大成』を見るに、気にかかる点がもう一つある。高野川に架る小野ノ橋を渡ると、岩倉道が北へ延びる。その道に沿うて南から北へ「五百らかん」「八幡宮」「花園」「中村」「長谷」が列なる。花園村の南に位置する「八幡宮」、これは何か。恰も三宅八幡宮のように見える。

その前に、八幡宮の南、小野橋を渡って最初に描かれた「五百らかん」を尋ねなければならぬ。これは曹洞宗西来寺で、『拾遺都名所図会』に「萬歲山西来寺 花園に有」「近年五百羅漢を興立す」とある。『愛宕郡志』によれば、西来寺は岩倉村「花園小字今井」に在り、今井は花園の「中央」に位置する。

西来寺は夙く焼亡して、今は知る人も稀である。京都バスの停留所花園町でバス通から岐れ長谷に至る道を北行すると、岩倉花園町三九〇番地、道の東側に大久保家がある。当主源一氏に聴くところでは、西来寺は当家の北裏にあり、今から八十年ほど前に焼け、五百羅漢の木像も焼失した。

その跡地を大久保家が買い取ることになり、五百羅漢と彫った石が遺っていた。もとここに流れていた川（花園川であらう）に石が転落したのを、長栄寺の前住職が請い受けていったという。

大久保家の前を過ぎてすこし北に進み、十字路で西に折れ暫く行くと、北側に臨済宗相国寺派長栄寺がある。なるほど、門の脇に「五百羅漢」と深く彫った石が据えられている。

大久保家や長栄寺は花園の中央というより、寧ろ北部といた方がよい。大正七年十二月秋元春朝編輯発行、秋元興朝稿『旧都巡遊記稿』に、「花園西来寺 長谷村の南方にあり」、本堂に「昔時より残れる阿羅漢凡百体を安置し」と記すとおり、長谷に近い。したがって、五百羅漢より北に位置する「八幡宮」を三宅八幡宮と見ることは到底不可能である。

しからばこの「八幡宮」は何か。天保二年の『京町絵図細見大成』では、今の花園橋に当る小野橋を渡って北へ「五百らかん」「花ぞの」「八幡宮」「中村」「岩倉」と列なる。寛保元年十一月（実は延享三年という）林吉永板『増補再板京大絵図』（新撰京都叢書所収）、寛政刊正本屋吉兵衛板『増補京絵図道法附』などには、花園の北に「長谷八まん」と記す。

すなわちこの「八幡宮」は、長谷、中、花園三村の産土神として崇敬される長谷八幡宮である。実は岩倉道から東に外れて山麓に鎮座するので、地図に描くように一線上に並ぶことはないけれども、道順としては当たっている。すると慶応四年図は、花園と八幡宮との順序を誤ったにすぎぬということになる。因に文久二年の『京都御絵図』には誤りなく、順序正しく記入されている。

さて三宅八幡神社は、寔に伊多太神社の旧地から現在地に移ったのであろうか。移建の時期を元禄十五年から天保二年の間とする『京都市の地名』の推定には、難点がありすぎて信ずるに足らぬ。昭和五十九年淡交社刊『京都大事典』は、「もとこの付近にあった式内社伊多太神社境内に祀ったが、江戸末期に現在地に移ったという」とする。さらに早く、昭和三十三年白川書院刊、竹村俊則著『新撰京都名所図会』巻一は、「もとこの附近にあった伊多太神社の境内にあったのを、明治になってこの地に遷したものである」とし、昭和五十七年駿々堂刊、竹村俊則著『昭和京都名所図会』3でも、文末を「とつたえる」と改めるだけで、その説を変えていない。

こうした移転説は近來のものようであるが、いずれも拠る所を明かにしない。当社の宮司は、もともとこの地に

あつたと断言し、移転説を否定する。さすれば、社伝というものではないらしい。

例えば、明治十二年十二月風月庄左衛門刊、橋本澄月編『京都府区組分細図』は、高野川右岸に「三宅八幡」を描いている。しかし市外は概念図となつてゐるため、その位置が現鎮座地の三宅であるのか、伊多太神社跡の大明神であるのか判別できない。両地は至近の距離にあるゆえ、よほど精密な地図でなければ判定不可能である。そして、近世末乃至明治初頭において、そのような地図を得ることは望みがたい。

文献資料に頼るかぎり、隔靴搔痒の感を拭うことはむづかしい。となれば、実地を探索してみるよりほかに術はあるまい。それで文献の限界を突破しうるかどうか。幸い神社の境内および周辺に石造物がたくさん遺つてゐる。銘の判読可能なもので、明治三十年以前の建立を挙げてみよう。

一、燈籠一基 社務所裏に在り。表「三宅八幡宮」、側「文化元年于六月吉日」「大津講中」。

二、燈籠一對 境内表参道三の鳥居前に在り。表「三宅八幡宮」、裏「文政十二歳己丑八月吉日」、側「大津三宅構中」、台「大津 三宅講」。火袋のみ新しく、後補か。なお本殿前の狛犬一對にも「大津 三宅

講」とあり、年記はないが古いものである。

三、燈籠一對 境内表参道一の鳥居二の鳥居の間に在り。表「三宅八幡宮」、側「天保十五年甲辰十一月」。寄進者名判読不能。

四、木燈籠一基 境内表参道絵馬堂前に在り。竿のみ石製。表「奉納上七軒中」、裏「文久三癸亥歳孟夏吉辰 丹政 近作」、側「石柱施主木屋源七」。

五、燈籠一基 境内表参道二の鳥居三の鳥居の間に在り。表「三宅八幡宮」、裏「会津 神林清順」、側「元治元年子十二月吉日」。

六、木燈籠一基 (四)と対をなす。竿のみ石製。表「奉納 先斗丁」、裏「慶応四辰年六月」、側「施主 糸久 魚字」。(四)(六)とも台に「昭和十七年十月修繕」。

七、燈籠一對 境外西参道に在り。表「献燈」、裏「明治二己巳季八月」、側「安木家」。

八、燈籠一對 境内西参道鳥居前に在り。表「常夜燈」、裏「明治二歳八月建之」。

九、燈籠一對 境内表参道三の鳥居内に在り。表「三宅八幡宮」、側「明治二己年記」、台「ざこば」。

十、燈籠一對 境内表参道一の鳥居内に在り。表「御神燈」、裏「明治十三年辰十二月建之」「中川徳右エ

門」。

- 十一、燈籠一對 本殿前に在り。表「御神燈」、側「□五
午年九月立之」、裏「中川為吉」。明治十五年と推定。
十二、燈籠一對 本殿前に在り。表「御神燈」、裏「明治
十六未年三月立之」、「当村太田丁」。
十三、手洗水鉢 参詣者休憩所横に置く。表「奉納 当村
八幡町」、側「明治十九年第十月」。現在使用せず。
十四、井筒 手洗水舍傍に在り。表「奉納 (三杵の紋)」、
側「明治二十三年第八月」。裏「九代目市川團十郎」。
十五、標柱一基 境外西参道入口に在り。表「三宅八幡神
社」、裏「明治廿六年八月建之 当村三軒町中」。
十六、鳥居一基 境内表参道二の鳥居。「明治廿八年六月
建之」「神鳩講社」。山端から移したか。
十七、橋柱 池泉小流の石橋。「明治廿八年六月」 京都
西□家 黒田米□ 俣□」。
十八、燈籠一基 境内表参道二の鳥居三の鳥居の間に在り、
(五)と同形で対をなす。表「三宅八幡宮」、側
「明治二十九丙申年三月建之」、裏「願主 当村二
股清次郎」。
十九、標柱一基 上高野木ノ下町三宅八幡駅前^{しも}に在り。表
「三宅八幡神社」、裏「明治二十九年十二月建之
当村清水町中」。山端から移す。

二十、燈籠一基 絵馬堂後に在り。表「常燈」、裏「明治
三十年一月建之」。

二十一、門柱一對 本殿前に在り。裏「明治三十年一月建
之」「井口茂吉」。

以降、明治、大正、昭和、平成まで寄進が絶えることな
く、信仰の厚さ広さのほどが窺われる。また、明治四十年
三月陸軍大臣寺内正毅による「戦利兵器奉納ノ記」の碑、
明治四十三年天長節湯本文彦謹譲の「韓国合併奉告祭碑」
が建立されているのは、当社が村の一中心をなしていた徴
であろうか。

ここで注意を惹くのは、文化元年の燈籠に已に「三宅八
幡宮」の社号が刻まれており、文政十二年には「三宅講」
と名づける講ができていたことである。もし伊多太神社の
あった大明神に創祀されたとしたならば、何ゆえ三宅と称
したのか、理解に苦しまざるをえない。

現物が今に遺るものの外にも、明治初頭までにあまたの
寄進があつたらしい。当社「古今記録下調」から拾えば、
文化六年八月大津三宅講より神前境外宅地と茶所一棟建築、
天保十五年五月伏見町月参講より狛犬一對寄付、弘化二年
冬手洗井戸改修、嘉永五年京都いけ辰より山端鳥居脇に石
燈籠寄付、同年八代目市川團十郎より石井筒寄付があり、

明治二年十一月拜殿を建築している。

この外にも経巻、什物等の寄付があり、それらを収納する建物がなければなるまい。さらに当社には、信者の献じた大絵馬が多く保存されており、最も古いものは嘉永五年九月奉納である。それならば絵馬堂も必要であろう。

大明神町の伊多太神社址というのは、西明寺山の西麓で、その下がまた崖になっており、狹隘の土地である。しかもそこは森であった。『愛宕郡志』によれば「境内三十二坪」、これだけの建物や石造物、建てて建てられぬこともあるまいが、講中の参詣があつた日には立錐の余地もないのではないか。とにかく立地条件が悪すぎる。だから移転したのだと言うかもしれぬが、俄に納得しがたい話である。

八幡社は、京都の旧市内にはさほど多くなく、市外の農山村に多く分布する。高野村大明神に八幡のささやかな祠があつても異とするに及ばない。しかしながら、三宅八幡宮と号して遠近に神威を振うようになった化政度には、現在の鎮座地にあつたと見るのが至当であろう。

伊多太神社と三宅八幡神社とが結びつけられる因縁はなくもない。『愛宕郡志』に、崇道神社の境内攝社として挙げる中に「伊多太社 三宅八幡宮遥拝所」がある。『旧都巡遊記稿』にも、高野社すなわち崇道神社境内の下端「右に伊多太大神三宅八幡宮の遥拝所あり」と記す。いずれも

明治四十一年伊多太神社が崇道神社境内に遷る以前に書かれた記事であろう。『旧都巡遊記稿』は、これとは別に伊多太神社を挙げ、「高野村より三宅八幡へ行く道にあり」とも記している。

『山城名勝志』に高野郷惣社すなわち現崇道神社の末社九神の一つに「いたくの大明神」を挙げ、これは伊多太神社かとし、「今高野村西山際ニ森アリ社ハ絶ユ有二社領田字一九月九日祭」之土人いたく大明神ト云」とある。これによれば、大明神の社は崇道神社に在り、旧址の森では土地の人が祭を行つていたと解せられる。

明治十六年に至つて大明神の森に伊多太神社を再興した。そして『愛宕郡志』の推測するように、崇道神社境内のいたいた社を遥拝所に改めたのであろう。同時に、同方角に当るところから、三宅八幡宮遥拝所も兼ねたというのが実情ではなからうか。神社はここから近いとはいへ、大原街道を通行する人がわざわざ立寄るとすれば、往復小一時間を要するであろうから。

明治四十一年、伊多太神社が崇道神社に遷されれば、伊多太神社遥拝所は役目を了る。その際に三宅八幡宮遥拝所がどうなったのか、処置を伝える資料を見ない。ただ『修学院史誌』に纔に手がかりが索められる。崇道神社境内攝社を挙げる中に、伊多太社、三宅八幡神社を一つの社とし

て併せ記している。これより察すれば、伊多太神社を遷して遥拝所を廃した時に、三宅八幡宮遥拝所も廃して、祭神として社殿に合祀したという経緯が想像されよう。

三宅八幡移建説が生れたのには、両社のこうした縁が絡んでいたのではなからうか。移建説の根拠が明かではないので、これ以上は疑問としておくよりほかあるまい。

当社に関して古いことは一切判らない。大正四年十月、京都市編纂発行『新撰京都名勝誌』は、小野毛人勧請を紹介するものの、「年代順京都名勝表」で創立を天正以後と認むるものに入れている。天正以後といっても、幕末までの期間であり、つまり創立時不明、さして古くないという認定である。

石造物の調査によって確に言いうることは、文化文政の頃から、三宅八幡宮と称し、信者の講ができるほどに、神威盛んであったということである。小児の病に驗ありとされるが、梨園や花街にも信心する者のあるところを見ると、利生は小児に限らなかつたらしい。かほどの繁昌を呈するためには、文化文政の前史がなければなるまい。「古今記録下調」には、「寛政・享和のころより御神威ますますさかんに増し」とある。ただしその拠るところは明かでない。

京、伏見はおろか、大津、大阪にまでも盛名治き神社でありながら、文久二年板『京御絵図』まで、その名を登録する地図、名所記の類が見当らぬのは何故か。

当社が文化文政、あるいはやや溯つて寛政享和の頃に興つた神社であるとすれば、最も広く江湖に迎えられた安永九年板の『都名所図会』、天明七年板の『拾遺都名所図会』に採られぬのは当然である。そしてこれ以後、先人の遺漏を補い、且つ新興の名所を拾うに、積極的な意欲をもつた名所記は刊行されなかつた。多くは先行書の糟粕を営めて能事畢れりとする名所記であつた。

例えば『京羽津根』の文久三年板を初め、元治改正、慶応改正、明治四年の明治改正板に至るまで神社、寺院、名所の部には改訂が認められず、勿論三宅八幡宮はない。また、編者名も刊記もない『天保刻成 京都順覧記』に対し、竹原好兵衛板、池田東籬亭編の増補版があり、さらに慶応元年初春の再刻版が出ている。だが三宅八幡宮の追加はない。元治元年七月禁門の変によるいわゆるどんどん焼けに、京都の景観は一変した。しかるに天保板と慶応板との間に、何の増減もなく、名所案内の文にいささかの変更もない。

名所記が新規開拓の氣運を失い、保守退嬰に陥つては、三宅八幡宮の採り上げられる機会は容易に訪れそうもない。

また、名所として書くほどの由緒をもたなかったのもある。

そうした停滯の中で、所在地を誤ったとはいえ、文久二年の『京都御絵図』が三宅八幡を記載した功は大きかった。一旦何かに採り上げられると、後続の出版物もこれに倣う。それが名所記、地図の習性だからである。慶応四年の『京町御絵図細見大成』が続き、明治十年の『京都名所順覧記』に引継がれ、纏て位置の誤記も修正される。明治十二年十二月の『京都府区組分細図』のごときはその早いものである。やや北にゆきすぎる嫌はあるが、ともかく高野川右岸に「三宅八幡」が鎮座する。

名所記と異なり、地図は現況の速報を貴ぶ。寺社、施設等の新設、退転、移建があれば、埋木によるなどして直にそれを地図に表す。三宅八幡宮の登載において、名所記よりも地図が先行した所以である。

それにしても、明治二十八年までは、なお宣伝が行き渡らなかつたのであろうか。依然として三宅八幡宮の存在を無視する地図も眼につく。明治十四年六月、土方善賢編輯出版『新撰京都市中細見全図』、明治二十三年二月一日風月庄左衛門刊、片岡賢三編『改正新刻京都市郡名所新図』などがそれである。

利生と由緒と、三宅八幡神社に実も花も備わるのは、遷都千百年、内国勸業博覧会開催の明治二十八年であった。これ以後の名所誌や地図が当社を看すごすことは、まづ無いといつてよい。

それには、二十八年を目標しての神社の経営、信者の熱意が与っていると思われる。「古今記録下調」を見ても、二十六年から二十八年にかけて、殿堂、境内、参道の整備が進められた様子を知ることができる。また現存する石造物にも、その一端を窺うことができる。

明治二十八年刊『京華要誌』は、「境内西明寺山の麓にありて土地高燥老樹陰森として社殿を蔽ふ近來桜楓等を栽ゑたれば社頭の風致また佳なり都俗小児の病に祈願すれば忽ち平癒するの神驗ありと称し賽詣群集し宿屋料理屋等あり」と叙している。門前の料理店については、明治三十六年三月村上書店刊、谷川虎吉著『愛宕郡名勝旧蹟概覧』に「三宅八幡ノ花萬楼」を挙げる。また同年四月、京都市参事会著作発行『京都名勝記』上には、「鳥居の数は千許に達して恰かも洞門の状をなす」、「神鳩幾十、飛翔喚呼して頗る画趣あり」と記す。境内の景観も整い、門前町も形成された。

大正十四年、出町柳から八瀬まで叡山電鉄が開通し、三宅八幡駅が設けられた。駅から十数分歩けば神前に詣でる

ことができる。三宅橋を渡った表参道入口に、十五年六月混凝土製の巨きい朱鳥居が建てられた。昭和四年鞍馬電鉄が通じ、八幡前駅が開設された。徒歩二分で西参道を通り神前に到る。大原街道を歩き、半日、一日がかりで参拝したことは、もはや昔話となった。

交通の利便が、神社に、参詣者に、関係業者に何を齎したか。影響は少なからぬものがあつたにちがいない。しかし、その変遷を具に誌す名所記の類は意外に見出しがたい。昭和三年十一月大京都社刊、西村善七郎編『大京都』に、「境内は西明寺山の麓を占め、土地高燥老樹鬱々として社殿を蔽へり。近時桜、楓を植え、神苑の池には初夏の候、あやめ蓮等咲き匂ひ、群鳩の遊ぶさまも愛らしく、社頭の風致頗る佳なり」という。昭和七年八月東亜通信社刊、野中凡童編『大京都誌』に、「境内は土地高燥、老樹鬱蒼とし、その間に千余の鳥居が洞門の状をなして並んでゐる」という。あやめ、蓮の咲くほかは、すべて『京華要誌』『京都名勝記』の轍を履むにすぎない。名所記なるものの陋習の抜き難さを、ここに看る思いがする。

電車が走るようになって、参拝者は幾層倍もふえたことであろう。それにひきかえ衰退したものもある。大原街道、若狭街道とも敦賀街道とも呼ぶが、この街道筋が参詣道で

はなくなった。山端に建てられていた鳥居、燈籠、標柱がいつか取払われ、移転した。山端あたりに茶屋、土産物屋が店を列ねていたはずであるが、今や昔日の面影はない。古い暖簾を誇る料理屋として平八、十一屋がなお健在とはいえ、気軽に立寄ることのできる茶屋ではなくなっている。参詣人や旅人の往来が絶えた以上いたし方もあるまい。

表参道入口に建つ朱鳥居の寄進者に、「当村 森鳩堂五十川団次郎」「山端 鳩八ツ橋鳩神堂」の名が刻まれている。こうした店もどうなったのか消息は知れない。今なお山端に孤塁を守る菓子屋がある。双鳩堂という。三宅八幡にゆかりある屋号で、名物「鳩もち」を売っている。鳩を象った米粉の団子で、白糖、抹茶、肉桂の三色がある。ただし、今は三宅八幡と縁がないという。

門前の宿屋、料理屋もいつ消えたのか、表参道にも西参道にも、往年を偲ぶよすがもない。電車に乗って短時間で参拝をすませるようになれば、食事、宿泊の用がなくなるからである。また、参拝が簡単になれば、講を結ぶ必要も薄れるであろう。講による燈籠などの寄進も昭和九年頃で終っている。参拝が個人化したことも、門前の賑ひに影響するところがあつたと思われる。

さらに時移り、昨今のように自家用車で乗りつけることになれば、門前の商いは全く成立たなくなる。境内の茶店

で事は足る。

茶店で聞くに、子連れの参拝は今も多いという。しかし、子供の好みがすっかり変ってしまった。「麦藁細工の人形を持つてゐる人は皆こゝへお詣りしての戻り途である」と、田中緑紅の『京都神仏願懸重宝記』（昭和十八年十一月郷土文化研究会刊）にある麦藁細工は夙くに消えてしまった。鳩の玩具や万華鏡を置いているが、今時の子供はあまり喜ばぬとか。甘酒があるけれども、自動販売機の飲料の手軽さに傾くらしい。

鳩もちだけは今も相当に人気があるという。形も色も双鳩堂のと似ているが、甘味がやや強いように感ずる。一般向きの味というのであろう。聖護院八ツ橋総本店の製造である。井上甚之助『わたしの京都』（昭和四十八年四月墨水書房刊）に、「鳩の形をした生八ツ橋」に六十年前、三十年前を思い出し「懐かしかった」と書いている。さればこれが最後の三宅八幡名物。

〔付記〕本稿提出後に三宅八幡宮絵馬保存会より『洛北上高野八幡さんの絵馬』が刊行された。刊記に平成十七年三月三十一日発行とあるが、実際の発刊は八月らしい。これによって本稿の論旨を改変する必要を認めないけれども、補うべき点はいくつかある。その一つ、崇道神社御旅所から発見された古文書に、天保四年十二月三宅八幡宮、庄屋、年寄、

百姓代連名で京都奉行所に差し出した書面の写しがあった。これによれば、天明度に御改めがあったこと、享和三年に禁裏御所の寄附により本社屋根を檜皮葺に更めたことが知られる。すると、天明の頃には当社がすでに鎮座していたと見なければならぬ。